

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



テレビ朝日の取材に緊張気味にこたえる子ども。この場面は残念ながら放送されなかった(カササギの森)

Contents

- GEN 第12回会員総会のご案内 P 2
- 写真コンクールインターネット投票のお知らせ P 2
- イベント報告 P 3
- 春の黄土高原ワーキングツアー報告 P 4

2006.5

109

認定 NPO 法人 緑の地球ネットワーク

緑の地球ネットワーク 第12回会員総会のご案内

GEN が中国山西省の黄土高原で緑化協力活動をはじめて 15 年。小さな NGO がこれまで活動をつづけてこられたのも、会員をはじめとするたくさんの協力者のおかげです。今回の会員総会では、長年にわたって会員として GEN をささえつづけてくださった方々に、あらためて感謝の意を表する場をもうけたいと考えています。

会員総会後の記念講演は 1994 年の第 1 回専門家調査団のメンバーで、植物生態学をベースに造園や緑地保全、乾燥地緑化に詳しい前中久行さんにお願ひしました。

また、黄土高原写真コンクール入賞作品の発表・表彰もおこないます。そのほか、大同の緑化の最新事情や現場で働く人々

からのメッセージをご覧いただけるようなプレゼンテーションを計画しています。まだ大同に行ったことがない方、長く大同を訪ねていない方、また、最近訪れた方、みなさんにお楽しみいただけるように工夫をこらします。好評の懇親会も予定しています。

会員以外の方も、記念講演、写真コンクール表彰&プレゼンテーション、懇親会にご参加いただけます。会員総会を傍聴していただくこともできます。お気軽にどうぞ。

なお、会員の方には追ってくわしいご案内をお送りします。

【緑の地球ネットワーク第 12 回会員総会】

●日時：6 月 17 日（土）13 時 30 分～19 時

○会員総会：13 時 30 分～14 時 40 分

○記念講演『植物とのうれしいつきあい方』：15 時～16 時 20 分

前中久行さん（大阪府立大大学院教授）

○黄土高原写真コンクール入賞作品発表・表彰&プレゼンテーション“大同・2006” 16 時 30 分～17 時

○懇親会：17 時 10 分～19 時。軽食つき。会費 1,500 円（予定。要申込み）

●場所：大阪市立総合生涯学習センター第 1 研修室（大阪駅前第 2 ビル 5 階各線「梅田」駅、JR「大阪」駅／東西線「北新地」駅）

●申込み・問合せは GEN 事務所まで。

●申込み締切：6 月 12 日

★懇親会の企画・世話係を募集しています。

GEN 会員のなかまも、楽しい懇親会を企画・演出してみませんか。希望者は GEN 事務所までご連絡ください。

GEN15 周年記念 黄土高原写真コンクール インターネット投票のお知らせ

GEN15 周年記念黄土高原写真コンクールにたくさんのご応募をいただき、ありがとうございました。最初はなかなか作品があつまらずやきもきしましたが、締切が近づくとつれて続々と写真がとどき、おかげさまで 70 人ちかくの方からご応募いただきました。なかにはお 1 人で 10 数点送ってくださるケースもいくつかあり、参加作品を 3 点選ぶ事務局の責任は重大。

植林作業、村のようす、子どもたち、風景、思い思いにえらばれた作品はバリエーションゆたかで、みなさんの気持ちが伝わってくるようです。GEN の活動の記録としても、貴重な宝物になりそうです。

お送りいただいた写真は、今後、会報をはじめとする印刷媒体や、写真パネル、インターネットなどで GEN の活動をひろめるために広く活用させていただきたいと考えています。

参加作品のなかから入賞作品をえらぶにあたり、インターネット投票をおこなうことにしました。その結果を参考にして、各賞を決定したいと思います。

5 月 19 日を目標に、下記の URL に応募作品をアップします。少々遅れるかもしれませんが、ときどきチェックしてみてください。投票期間は 6 月 2 日までの予定です。気に入った作品に、ぜひご投票ください。
<http://www.k4.dion.ne.jp/~gentree/zvphotoc.html>

枚方ハイビスカスのみなさん ご協力ありがとうございました

枚方市の会員・貝野壽鶴子さんと地域のグループ・枚方ハイビスカスが貝野さん宅のガレージでガレージセールをはじめたのは 1998 年 12 月です。毎年 1～2 回のペースで開催して今年 4 月に第 10 回目となりました。10 回を区切りにこの催しは終了します。

手作りの手芸品、家にある不用贈答品などを持ち寄って販売した売上収益金と個人のみなさんからのカンパを毎回 GEN にお寄せいただきました。10 回分の合計は、なんと 1,090,499 円になりました。

関係者のみなさん、ほんとうに御苦労さまでした。ご協力に心から感謝します。



認定 NPO 法人への寄付に関して 税制改正のお知らせ

GEN は国税庁の認定をうけ、2005 年 6 月 1 日から認定 NPO 法人になりました（有効期間は 2 年間）。認定 NPO 法人への寄付

は寄付金控除等の対象となります。

今年 4 月の税制改正で、寄付金についての税制について変更がありました。税が控除される寄付金は 1 万円以上から 5 千円以上に改正されています。

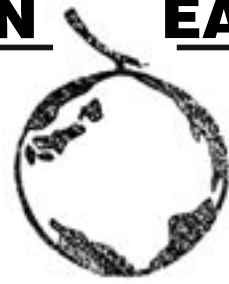
○個人の場合、「寄付金額－5 千円」を所得金額から控除できます。つまりすでに支払った所得税から還付を受けることができます（確定申告の必要があります。限度額は所得額の 30% です）。

○企業の場合、寄付金を損金として扱うことができます（一般の寄付金にかかわる損金算入限度額とは別に、それと同額の枠があります）。

○相続・遺贈による財産を寄付した場合、相続税の課税対象になりません（対象になるのは相続税の申告期限までに寄付されたものです）。

ひき続き、カンパ等にご協力をお願いいたします。





豊かな自然を堪能 ～伊豆台宿報告

藤原 國雄 (GEN 会員・高校教員)

4月22日(土) 午後1時、狩野川記念公園に集合。今回は23名が参加。同僚2名が車を出してくれました。

簡単な自己紹介のあと、車に分乗して達磨山展望台にむかいました。薄曇りでしたが、遠来の客を迎えるかのように、久しぶりに富士山が駿河湾越しにその姿を見せてくれました。

達磨山の頂上まで笹で覆われた登山道を標高差100mの登り。富士山に甲斐駒ヶ岳、白根三山も遠望できました。

一路南下し2000年におこなわれた全国植樹祭会場へ。管理状態はよくありません。その後仁科峠で「フォッサマグナ要素」のマメザクラやアセビを見た後、黄金崎海岸を経由して宿舎の土肥高校に向かいました。

グラウンドの一隅にある合宿所「輝潮館」では、すでに同僚のボランティアが夕食の準備をしていていました。夕食まで1時間ほど、温泉に入ったり、七輪で干物を焼いたり。刺身と干物と豚汁のおいしい夕食をいただき、植物との出会いをテーマに自己紹介をし交流会を持ちました。

翌23日はあいにくの雨。まず、天城の「太郎杉」を見にいきました。樹齢400年といわれる巨木は、周囲を圧倒してそびえています。木に触れてみると「木霊」を感じることができるような気がしました。

次いで、中伊豆の筏場のわさび畑へ。年間を通して15℃程度の湧水を供給することができる豊富な降水量と天城山の水源涵養力が可能にした畳石式の栽培です。

その後「コビサワラ原生林」へ。林道に車をおいて杉林を登ること15分。薄暗い杉林を抜けると急に視界が開けました。モミ、ヒメシャラ、ヤブツバキ、ブナなどの落葉広葉樹と照葉樹の混合林です。林床は腐葉土が堆積してふかふかしています。30分ほどのコースを散策しました。森の中では傘もいらない程度の小雨で、時折霧が流

れてきて幻想的な感じがしました。「多様性のある森」を感じた一時でした。その後、萬城の滝で昼食をとり解散しました。

みなさん、大同でまたお会いしましょう。

山笑い、人笑う 緑のフェスティバル報告

4月30日、比良山麓・馬ヶ瀬山で開催の緑のフェスティバル(「NPO 自然と緑」主催)にGENから10名が参加しました。ほかにもいくつかのグループ、子どもたちもたくさん参加してにぎやかでした。

GENグループはヒノキの間伐作業に参加。経験者は次から次へとヒノキをノコで伐っていきます。私は初心者グループでスタッフのていねい親切な指導を受けました。じつは、まばらながら10年ほどの経験あり。年々腕が上がるどころか、腕がだるくなるばかり。ほどほどの作業参加でした。

待ちに待った昼御飯。まずビールで乾杯。メニューは近江米のおにぎり、ブタ汁、種類豊富な山菜等の天ぷら、おひたしや酢の物、海老のかき揚げ、コアユ・海老の佃煮と山の幸、琵琶湖のめぐみがいっぱい。ボランティアのみなさんが朝から作ってくださった料理はほんとうにおいしかった。

食後は周辺の自然観察。ヒノキ林のなかにはコバノミツバツツジが花盛りで林を明るくしています。足元にはシキミやイワカガミ、スミレが可憐な花をつけていました。

真下にひろがる琵琶湖が遠くかすみながら見渡せます。ここから見えるのは全体の約三分の一とか。スタッフのみなさんはこの馬ヶ瀬山に本当にくわしく、たくさんガイドしていただきました。

開会のあいさつで、こんな季節を「山がわらう」ということでしたが、山もわらい、人もわらう1日でした。(太田)

「森林の市」報告

村瀬 智之 (関東ブランチ)

4月29・30日の2日間、東京の日比谷公園で「森林の市」がおこなわれた。関東ブランチがこのイベントに参加するのは今年でたしか3回目だ。

今回の森林の市は2日間とも太鼓の音ではじまった。1日目は曇りのち雨とあいにくの天気だったが、2日目は朝から気持ちよく晴れ、たくさんの人が芝生の上のGENのブースを訪れた。

若者でごった返していた国際協力のイベントとは違い、訪れる人々の年齢層はやや高め。その多くがパンフレットや無料のグッズを持ちきれないほどかかえている。そんななかで1人の女性が言った。「日本だけでなく、中国だって結局はつながっているんだから、(環境について)同じように考えなきゃね」。その女性は展示されている写真や説明を熱心に見たあと、「もったいないから」とパンフレットを受けとらずにブースを後にした。

森林の市には日本各地の森についてのブースや、地域の名産を売る店がたくさん出展している。ふだん環境にかんして積極的にはかかわっていない人の意識に少しでも訴えることは、今後の課題でもある。

関東ブランチでは、イベントで絵ハガキや切り絵、高見さんの本などを販売し、その売り上げが合計5万円に達したらカササギの森に寄付することになっている。今回の売り上げを今までのものに合計するとめでたく5万円に達し、1口寄付することが可能になった。多くの方のご協力の成果だと思う。この場を借りてお礼を申し上げたい。



フジザクラともいわれるマメザクラ。2cmほどの小さな花が下向きに咲く。

郵便振替に関するおねがい

郵便振替の窓口取扱手数料が4月から値上げされました。GENからお送りする赤で印刷された振替用紙をつかって送金していただく場合、手数料は受取人払い、つまりGENが支払っています。従来、窓口で手続した場合、会費の送金だと120円だった手数料が150円になりました。ATM(自

動預払機)をご利用いただくと、従来どおり60円ですみ、90円の節約になります。ATMのご利用方法はそれほど面倒なものではありませんので、できるだけATMで送金していただき、GENの料金負担が少なくすむようにみなさんのご協力をお願いします。

2006 春の中国黄土高原

黄砂に大同を思う ～春のワーキングツアー報告

今春の大同も、ツアーや視察などをたくさん受け入れてにぎわいました。GEN のワーキングツアーが 3/25 ～ 4/1 (28 人)、東北電力総連の協力隊が 4/11 ～ 18 (14 人)、国際ソロプチミスト奈良 6 クラブが 4/25 ～ 29 (16 人)、そのほか、GEN のツアーの航空券を手配している旅行社・国際交流サービスの仏教美術を訪ねるツアーに大同で記念植樹というスケジュールがはいったり、夏にツアーを予定している団体の下見、TV やラジオの取材など、大忙しでした。そのなかから、GEN のツアー参加者と、東北電力総連のツアー参加者に、手記をよせていただきました。それぞれのユニークな視点から書かれた手記をご紹介します。

実際に体験した中国

島崎 大樹 (GEN ツアー参加・高校生)

私は今回のツアーで農家にホームステイをして、現地の住民の生活やおかれている環境を実際に体験できた。その体験を通し、砂漠化の被害と、都市部と農村部における貧富の差を実感した。

黄土高原に到着してすぐに感じたことは、「色が無い」ということだった。まわりを見まわしても、あるのは茶色い砂と山ばかり。日本では考えられない状況だ。また、つねに黄砂が舞っていて、目を開けているのが困難なときもあった。砂漠化防止のための植林をしているとき、実際に羊の放牧を目にした。生きるためにしかたなくそれをするかれらを目の前にして、環境破壊だからやめろとは、とても言うことはできないと思った。

都市部ではかなりの発展が見られる中国だが、そこからすこしはなれた農村部にいくと、貧富の差は一目でわかる。まるで世界が違うのだ。ホテルやショッピングセンターの立ちならぶ都市部にくらべ、農村部には石づくりの家と畑しかない。乗り物は、自動車ではなくロバだった。生活環境の違いなどという言葉では軽すぎるだろう。同じ国とは思えなかった。

本やデータで得たイメージと、実際の姿があれほどかけ離れていたのには驚きだった。しかし、実際に体験したことで、今後の中国の課題も発見することができた。

中国での砂漠化を食い止めるためには、なにはさておき、急傾斜地における耕作と放牧を中止して、そこを草地化・林地化することが必要である。もちろん、農民への配慮を絶対におこたってはいけない。急傾斜地での耕作などを中止するかわりに、平坦地だけでもじゅうぶんに暮らしていけるような状態にしなければならない。そのためには、作物の生産性を飛躍的にたかめる必要がある。それには外国からの研究情報、技術、物資の協力が不可欠だろう。

また、都市部と農村部の貧富の差をうめるためには、今あげた作物の生産性の向上のほかに、家庭燃料の不足をおぎなうため

大樹 (GEN ツアー参加・高校生)

のあらたな研究が必要である。

行く河の流れは……

藤田 修二 (GEN ツアー参加・元新聞記者)

「行く河の流れは絶えずして……」(方丈記)は、鴨長明に思い入れしてもらわなくても、誰しもの普通感覚であろう。ところが、中国の華北では「絶えている」のがどうも普通らしいと知った。華北のすべての河川がそうではないにしても、かなり危機的な状況に陥っていることを、今回の旅は類推させてくれた。

中国の水問題の定番は「黄河断流」である。あの大河が途中で途切れてしまう現象だ。幸い 2000 年以降は起きていないそうだが、それでもかつてのとうとうたる流れは、もはや夢まぼろしの世界になってしまったようである。黄河だけの話かと思っていたら、北京の重要な水源の一つ(だった)桑干河もそうだった。大同市内では、まだそれでもどす黒い水がたまっていた。ところが、永定河と名前を変える下流、盧溝橋の下には一滴も水がなく、枯れ草の中に遊覧ボートが数隻放擲されていた。

日本ではあまり知られていない桑干河(永定河)といっても、日本人の感覚ではとてつもない大河である。日本最長の信濃川よりはるかに長い。日本で僕が見た中では、自宅近くの小さな川で夏の日照りの時たまに断流現象が起きる。しかし大河川では、大井川が数多いダムの影響で随分流れがやせていると実感したほかは、断流なんて見たことも聞いたこともない。

いろんな報告によると、黄河断流の主因は急速な灌漑の拡大と水の浪費らしい。桑干河(永定河)の場合も似たりよったりなんだろう。かつて永定河は盧溝河といい、「盧溝曉月」は「燕京(北京)八景」の一つと謳われたという。そんな昔でなくとも、ネットで見る盧溝橋の写真の中には、流れ

めざましい経済発展を見せている中国だが、そのかげには見すくすことのできない大きな問題がひそんでいる。



干上がった永定河と盧溝橋

が見えるものもある。極く最近になって、無残な姿をさらすことになったのか。あるいは、上流のダム操作で、一時期流れることもあるのか。

中央アジアにある世界第 4 の大湖、アラル海が消滅しつつある。原因は湖に注ぐ二つの大河の流れがほとんどなくなってしまったためだ。元をたどせば、流域の広大な半砂漠地帯に大規模な灌漑を施し、社会主義分業体制の下で、綿花などの産出の役割を担わされたためだ。様々な被害が報告されているが、元に戻す術はない。非持続可能な開発の最悪の例として、世界遺産に登録するしか役割が果たせないのではなかろうか。

華北の地上水が消えつつあるということは、地上から補給される地下水も消えつつあることと同義である。現在の北京は大半を地下水に頼っているらしい。高見事務局長は「後ろ姿の北京は砂上の楼閣だ」と指摘されているが、北魏の都と同様に、後年「かつてここに北京という首都があった」と振り返られるようなことがあってはならない。

黄砂の空に思う

蔵野 妙子 (GEN ツアー参加)

3月26日、夜行列車から降りた大同には雪が舞っていた。

まずは、呉城小で植林、すでに穴が掘ってあって、子どもたちと植林。そして、中国のトイレ事情が20数年前に西域に旅行したときと変わっていないことを知った(これは水をつかわないし、肥料にもなるし正しいやり方だと思う)。午後、霊丘にむかうバスの中から、山の上まであらゆる土地を段々畑にしている状況を見た(これだけの人口を養うには必要かも、でもいまや中国も食料輸入国になっている)。

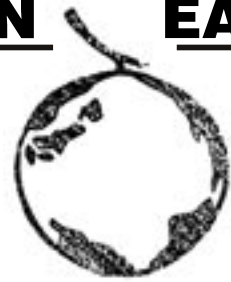
翌日、霊丘植物園の小さな谷地に、日本と同じような優しい自然を見て感激。まわりの山はGENが借りあげて植林もしているが、放牧を止めただけで緑が回復してきたという。すばらしい、ここは昔、森だった、人が介入しただけで自然はもどる。

27日はホームステイ。唯一の寝室兼食堂兼居間は私達5人でいっぱい。家人の親子4人は親戚の家に泊まりに行くという。寒いので暖房をしてもらったり、貴重な水で顔を洗わせてもらったり、食事ものいろいろでおいしかった。お母さんが味はどうかと聞くので、とてもおいしいといったら、自分は仏教徒なので肉や臭い物は食べないので味見ができないから心配したとのこと。じつに熱心に仏教の話をしてきた。中国は文革時に宗教を弾圧したけれど、神仏のあるところには自然が残ったし、守られる傾向がある。日本だって鎮守の森や、社寺のまわりにかくろうじて森が残されている。神を畏れる＝自然に謙虚になるということは今こそもっと必要なことだと思われた。

その家の小学生の男の子の1日の授業時間が10時間をこえるのに驚いた。でも、学校が大好きという素朴な輝きがとても新鮮だった。一方で、その努力がこの究極ともいえるエコ生活からの脱出を目指しているとするれば、水・食料……、考えるだけに恐

ろしい、なんて思っている自分がある。今、地球には65億の人がいる、あと半世紀もしないうちに100億になるともいわれている。この地球は人間だけのものではなく、小さな虫たちやその他あらゆる動植物のものなのに。時々、山の手入れにいて、贖罪しているつもりなのかもしれないと思う。

4月、東京の空を黄砂が覆った。かの地から飛んできていると思えば懐かしくもあるが、早魃の証左でもある。願わくば、私達が植えた木々が根付き、少しでも黄砂を押しとどめ、大地に一滴でも水をもたらして欲しいと思っている。



「仏教徒なので味見ができない」といいながら準備してくれたごちそう

嬉しかった笑顔

齋藤 隆英 (東北緑化環境保全労組八戸分会)

今回の旅でもっとも印象に残ったことは小王村での朝の散歩と小学校での交流でした。ホームステイした早朝6時、仲間と2人で村を散策しました。早朝の村は農作業にいく男性が多く、朝飯を女性が作っているようでした。私たちは村人にであうとザオシャンハオ(おはよう)と声をかけ、するとほとんどの人が笑顔で応じてくれました。最近の日本と中国の関係を考えると、日本人にこんな笑顔で対応してくれるとは思わなかったのととても嬉しくなりました。

小学校をのぞいてみると、先生らしき人に招き入れられ、部屋に案内してもらいま

した。なかで話をしてくれたのに私たちは言葉がよくわからず、非常に残念でした。中国語がわかればもっとコミュニケーションがとれたのに……。後悔先に立たず!!

小学校での交流では、子どもたちは服はボロボロで貧しいのにもかかわらず、非常に元気がよくいきいきとしていました。私は彼らと一緒に遊んでみて自分が幼少の頃を思い出し、懐かしさを感じました。この子たちはテレビゲームやパソコンがなくても楽しく生活できる知恵を持っているのでしょう。

中国の方たちが私たちをどう感じたかはわかりませんが、私は今回の旅で中国人と実際にふれあってみて報道の怖さを感じ、また、日本と違い雨の降らない貧弱な土壌の上で生活している大同の農村の人々を思うと、貧富の差や黄砂問題も一国だけの問題ではなくともグローバルな問題であると感じました。そしてぜひまた中国に行き、今回お世話になった現地の人たちにこれまで以上に協力したいと強く願っています。



2006 夏の黄土高原ワーキングツアー予告

黄土高原ワーキングツアーの特徴は、地元の人とともに木を植えるだけでなく、数々の活動拠点を訪ねること。環境林センターや白登苗圃、実験林場「カササギの森」…。大きく広がったソフト面の協力をごらんください。

●日程：7月29日(土)～8月5日(土)8日間

●費用：一般＝19万円、学生＝18万円(国際航空運賃、中国国内での交通費／食費／宿泊費、空港使用料、GEN年会費を含む。個人行動時の費用、旅券取得費用、個人でかける旅行保険

料は含まない。変更になる場合があります)※中国国際航空利用 ※関西空港発着 ※成田便利用の方は航空運賃の差額41,000円が別途必要です。

●訪問先：中国山西省大同市(北京経由)

●定員：30名

●申込み締切：6月23日

●問合せ・申込み：GEN事務所までご連絡ください。案内の書類と参加申込み用紙をお送りします。

植物屋のこぼれ話 (続編) その 8

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

●南限と北限の植物

黄土高原でなにを植えていますか?と人によく聞かれる。「おもにマツですがね」とそっけなく答えているが、実際にも生えていないのだから仕方がない。中心になっているモンゴリマツとアブラマツは調べてみるとかなり分布が広い。アブラマツはマンシュウアカマツという和名があり、名の通り旧満州 (中国東北部) に分布して

いる。満州は場所にもよるが山西省よりも寒さは強いが乾湿指数は高い。緯度は少し北になる。モンゴリマツも北方に分布の中心がある。どちらも南方の湖北省などには生えていない。山西省が南限なのかよくわからない。山西省の山岳部に生えている遼東櫟 (リョウトウナラ) も緯度はあまり変わらないが若干雨量の多い地域に生える。黄土という特殊な土壌で乾燥する地方は、

日本のように全地域 1000 ミリ以上雨の降る国とはちがって南限・北限もあり意味がないのかもしれない。

●中国北部の気候区分

図 1 を見ていただこう。日本の西半分には A' 4 の記号がある。これは温帯ではもっとも緑豊かな常緑広葉樹の印である。揚子江東南部にも同じマークがある。この A のマークは湿潤気候の記号である。問題の山西省 (黒くぬりつぶしてある) には B' s のマークが入っている。B は乾燥気候の記号である。B' s はステップ気候で準砂漠気候である。ステップ気候は草は生えても樹木は生えない。しかし、昔には樹林があったといわれている。山西省の植生を見ると (図 2) 西北の一部分に砂漠のマークがある。東北部と東部に亜寒帯の針葉樹林があり、南部に温帯落葉樹林がある。そして中央の広い部分が草原およびサバンナになっている。これを見ただけでも砂漠と樹林の境目の地域であることが了解できる。この中央部は低地であってほとんどが農耕地である。そして東部の針葉樹林は山岳部であって南部の広葉樹林も山岳部にわずかにのこされているが、平地は農耕でつぶされている。

●山岳部には樹林ができる?

黄土高原は海拔 800m 以上あるが、1,500m 以上の場所には樹林がかなり残っている。人類がこの地に入ったころには約 40% が森林であり、川筋に点々と川辺林があつて、約半分ぐらいは草原であつたと推測できる。気象学的には 100m 高くなると 0.55℃ 温度が下がるから水分の蒸発量がそれだけ下がる。したがって同じ雨量でも寒さに強い樹木が茂ることができる。これが吉良先生の考えた乾湿指数である。よって山西省の山岳部に森林があつたのである。いまこの山岳部はかなり切り倒され、また放牧で芽生えが食べられて次代が育たずに草原になってしまった場所が多い。しかし、育つかどうかははっきりしない平地 (低地) よりもまず山岳部に植林すべきであることを痛感する。山に木が茂ったら安定した川の流れができ、低地の農耕に都合がよい。その後じょじょに川辺林などを復活させるのがこの地域の緑化の「必須の作戦」であると信じている。



東アジアの気候区分と植物帯の区分図

図 1

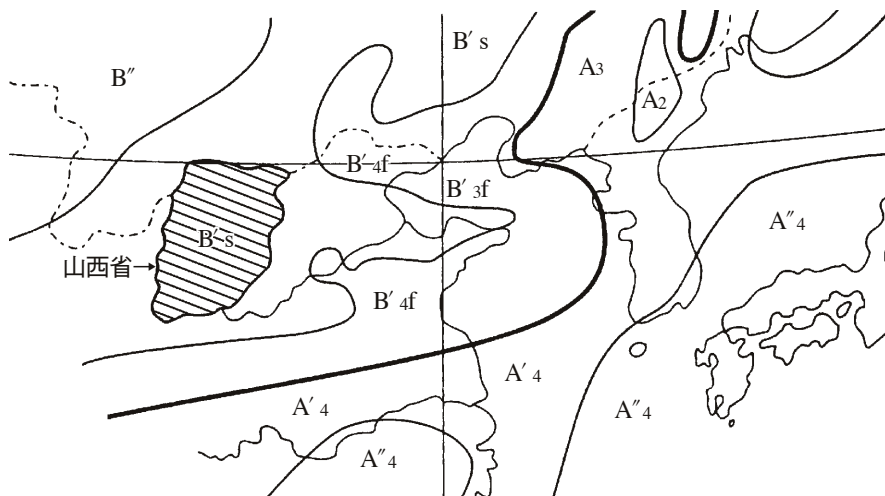
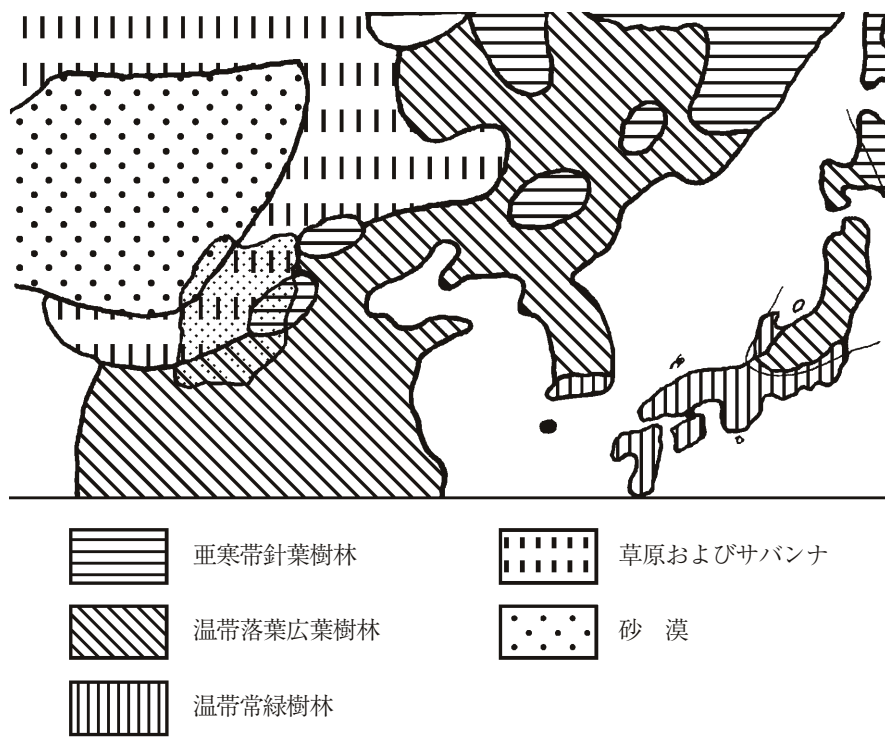


図 2



黄土高原史話〈30〉

「関市によって通商す」

谷口 義介（摂南大学教授）

2000年の夏、大同郊外の地球環境林センターで前漢時代の土器片を拾い、大いに吹聴したのがそもそものきっかけ。編集子の耳にも入り、「3～4回の予定」と依頼されてスタート。埋め草程度の意味はあろうかと勝手に思い込み、その後も続けて満5年、今回で何と30回目。

読み返してみても、今更ながら気付いた点あり。「黄土高原」史話と題しながら、どこからどこまでと線引きしていない。面積ざっと52万平方キロ、日本全土の約1.5倍と、とにかく広大。何を目安に区切るかで、その範囲も違ってくる。基準はともかく、GENが出した報告書『中国・黄土高原における緑化の可能性調査』と、雑誌『アジア遊学』第20号「〈特集〉黄土高原の自然環境と漢唐長安城」では、その東南部に洛陽盆地を入れるかどうかで、見解に相違が。ちなみに本シリーズはGEN説に拠る。

しかし、北部東半については、他の諸説も含め、万里の長城ラインで一致。現在の行政区画でいえば、ほぼ山西・内モンゴルの境界と重なります。

そこでまたまた気が付いた。中国文明の

象徴、地上最大の建造物ともいわれる万里の長城に関し、未だ一切言及なきことを。

宮城谷昌光『長城のかげ』は、漢初における匈奴との対立を背景にした好短篇。本シリーズの〈26〉と少しかぶりますが、拙稿では「辺境」「北辺」「塞外」はあっても、「長城」の文字はありません。ただ「塞」とは境界の意ですから、暗に長城を指しています。

ここでいう長城。初めに築いたのは趙の肅侯で（『史記』趙世家）、雲中・雁門・代の3郡を置いた武靈王が、これを延長・修築（匈奴列伝）。始皇帝の命による秦の長城は、この付近に限り、あくまで趙の長城を利用したもの。おりから強大化した匈奴の南下を防ぐのが目的です。

匈奴の侵入は、いわゆる「平城の恥」のあと、漢側の屈辱的な和親外交もあって、しばらく休止。前162年、文帝が匈奴に送った書状の中に、「漢と匈奴は隣敵の国」（『漢書』匈奴伝）、つまり隣り合った対等の国という文言がありますが、これはいささか強がりか。

また、「文帝の時、匈奴和親し、^{とも}与に関



長城遠望（明代）

市を通ず」（『冊府元龜』外臣部互市の条）と。

この関市、別に胡市ともいい、次の景帝・武帝にも引き継がれますが、文帝に仕えた賈誼の『新書』匈奴篇にやや詳しい記述あり。関市は特定の日に長城の傍らで開かれたが、その日には酒を売る者・食品を商う者など、200人ばかりの漢族商人が集まって店を開き、それを目当てに匈奴も多く姿を見せた、と。

武帝が即位した時も、「和親の約束を明確にし、厚く匈奴を待遇し、関市によって通商し、多くの物資を供給したので、^{ぜんとう}単于以下みな漢に親しみ、長城付近に往来した。」（『史記』匈奴列伝、小竹文夫・武夫訳）

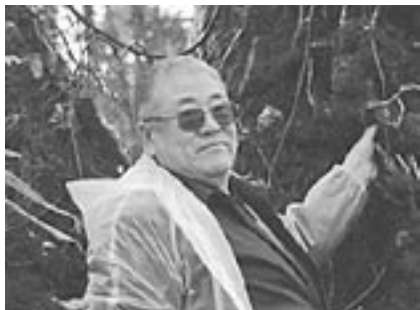
しかし、漢と匈奴の善隣友好関係は、山西馬邑で起ったある事件によって突然破られます。

追悼・侯喜さん

高見 邦雄（GEN 事務局長）

悲しいお知らせがつづきます。緑色地球ネットワーク大同事務所の技術顧問・侯喜さんが4月26日に亡くなりました。72歳でした。

老侯は大同市の林業局などで40年間働いたベテラン技術者であり、この地方の生き字引のような存在でした。1997年に定年退職したあと、すぐに私たちの事務所にきて、誠心誠意、事業の推進にあたってくれました。



2002年10月、北海道大学研究林で。

しごとについて、あれほど真剣で、責任感のある人はまれだと思います。プロジェクトを計画するときはかならず自分でなんども現地調査をおこない、植える苗木もかならず自分で選んでいました。カササギの森の計画と建設にあたっては、セメントが生乾きで、まだ電気が通っていない管理棟の、スチール製2段ベッドに寝泊まりし、陣頭指揮をとりました。植え方について熱心に説明する老侯の姿を思い出す、ツアー参加者のみなさんも少なくないと思います。

地元のテレビや新聞は、「大同の緑化に生涯をかけた老技術者が、いま日本との協力で第2の青春を送っている」といった特集を何度も組みました。そういうなかで老侯が「自分はすきなことをやっているだけだ。日本人たちが万里を遠きとせず、ここにきているのに、自分たちも一生懸命やらないわけにはいかない」と語っていました。

2002年の秋、老侯は訪日団の一員として

北海道を訪れ、北大の演習林を熱心に見学しました。「日本の森林被覆率が67%ときいて、とても信じられなかったけど、それが事実であることを自分の目でたしかめることができた」といって、遠くをみる目をしました。自分がとりくんできた緑化の成果を、老侯は自分の目でみることはできませんでしたが、あのとき頭のなかにそれを描いたのだと思います。

日本の専門家たちの現地調査や実験に、老侯の存在は不可欠でした。そのなかでえられた技術改善や発見が、大同の多くのプロジェクトのなかに広がっていったのも、老侯のおかげでした。

老侯は一昨年の年末、病気に倒れました。ガンだったのですが、風邪ひとつ引いたことのない人で、発見が遅れたのです。

4月20日、老侯を自宅に見舞うと、私の手をしっかり握って、この春のプロジェクトの実施状況などを聞いてくれました。そして、この協力事業の行く末のことをずいぶんと気遣ってくれたのでした。

情報ひろば
いっしょなかたち

自然・環境を学ぼう

第12期 自然大学

講義と野野外実習をととして、自然と環境を考えましょう。

【開校式記念講演（公開）】

－森林と人間、そして生命－

『森林と環境総論』

○日時：8月20日（日）13時～18時30分

○講師：只木良也さん（自然大学学長・名古屋大学名誉教授）

○場所：近畿中国森林管理局（JR環状線「桜ノ宮」駅西出口。大阪市北区天満橋1-8-75 TEL.050-3160-6739）

【第12期自然大学】

●期間：2006年8月20日（日）～2007年7月22日（日）（室内講義6回、野外実習7回）

●募集生徒数：50人（20歳以上）

●費用：3万円（テキスト・資料代。野外実習の交通費・宿泊費用は別）

●主催・問合せ・申込み：NPO法人自然と緑（〒537-0025 大阪市東成区中道3-2-34 TEL.06-6978-5060 FAX.

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

06-6978-5061 URL http://home.att.ne.jp/iota/sizen_midori/

●申込み方法：往復ハガキに、住所・氏名（ふりがな）・生年月日・電話番号・職業・特技を記入し、5月31日必着で上記あてお申込みください。

農を志す人、農に思いを馳せる人のための

第14期＜農塾＞2006年

「農的暮らし」の先達から、有機農業のすべてを学びます。

●講座スケジュール

【有機農業の米作り】

○日時：6月17日（土）13時、三田藍野駅集合（予定）

○講師：丹南合鴨農法研究会 酒井清さん

【自給循環型農業の豊かな暮らし】

○日時：7月15日（土）13時、JR播但線福崎駅集合（予定）

○講師：牛尾武博さん

以降9月16日、10月21日、11月18日、12月15日、2007年1月19日。

●募集人数：30名

●受講料：1回1,500円

●申込み方法：講義の10日前までに、氏名、住所（郵便番号）、性別、年齢、TEL/FAX/E-mail、参加動機・希望等を記入の上、下記まで郵送、FAX、Eメールでお申し込みください。

●申込先：神戸学生青年センター
（〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1
TEL.078-851-2760 FAX.078-821-5878
URL <http://www.ksyc.jp> e-mail :
info@ksyc.jp）

編集後記

「やたら声の大きな、えらそうなおっちゃんやなあ」……侯喜さんにはじめて会ったとき、そう思いました。なにしろあの恰幅ですからね。ところが、実にフレンドリー。北京からの通訳さんもへきえきする大同訛りで、よく話しかけてきてくれました。もちろん、まったくわかりません。手帳に書いてもらって、なんとか半分ぐらい意志疎通ができたでしょうか。

今年に入ってから、大同の緑化に尽力してくださった方が相次いで旅立たれ、寂しくなりました。のこされた緑を広げ、しっかり育てていきましょう。（東川）